

Title	【課題研究報告書】日本語学習者のカタカナ語習得に関する諸問題——中国母語話者と英語母語話者を中心に
Author(s)	高, 翔傑
Citation	
Issue Date	2024-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/18978
Rights	
Description	Supervisor: 本田 弘之, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

要旨

カタカナ語の習得が数多くの日本語学習者にとっては難点である。それゆえ、日本語学習者のカタカナ語習得過程における諸問題を考察し、および彼ら向けのカタカナ語教育改善策を講じることが日本語研究・教育の一環として、不可欠であると考えられる。

背景として、日本語表記の複雑性、カタカナ語(外来語)表記の不規則性、外来語受容(外来語の歴史変遷・外来語受容の実態・日本人の外来語意識・外来語批判)をそれぞれ詳しく考察した。

本論は、カタカナ語の習得過程において、母語知識、または第二言語知識の影響を大きく受けている中国語母語話者と英語母語話者の日本語学習者に焦点を当て、「PRISMA 2020」にあるフローダイアグラムを利用し、「J-STAGE」、「CiNii」、「国立教育政策研究所教育研究情報データベース」、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」、「中国知網」と「Google Scholar」の6つのデータベースから、「中国語母語+カタカナ」、「中国人+カタカナ」、「中国語母語+外来語」、「中国人+外来語」、「英語母語+カタカナ」、「英語母語+外来語」の6組のキーワード(中国知網の場合は特別にキーワードを「日語+外来語」と「日語+片假名」に設けた。)で1999~2023年の25年間の中国語母語話者と英語母語話者のカタカナ語習得・教育に関する文献を収集し、選別した。そして、選び出した35編の文献に基づき、文献総説を行った。

総説はまず先行研究を「中国語母語話者のカタカナ語習得」と「英語母語話者のカタカナ語習得」の2組に分けた。中国語母語話者に関わる文献が28編であり、英語母語話者に関わる文献が7編である。また各組の文献を「カタカナ語認識の傾向」、「習得過程における問題点」と「中国語/英語母語話者向けのカタカナ語教育」の3組に分類し、さらに「中国語母語話者のカタカナ語認識傾向」に関する文献を「カタカナ語に対する意識」、「認識過程における母語知識影響」、「認識過程における英語知識影響」、「カタカナ語に対する学習策略」の4組に、「中国語母語話者のカタカナ語習得過程における問題点」に関する文献を「カタカナ語自体の難点」、「カタカナ語回避現象」、「カタカナ語の誤用傾向」、「日本語教材の不足点」の4組に、「中国語母語話者向けのカタカナ語教育」に関する文献を「カタカナ語の指導」、「日本語教材の改善」、「副教材の導入」、「英語援用の位置付け」、「学習システムの開発」の5組に分けた。英語母語話者の場合は先行研究の数が極少ないので、分類しないまま先行研究を概説した。

そして、全部35件の先行研究の概説内容に基づき、考察が行われた。中国語母語話者の場合は「英語知識影響」、「教材の不足点」、「回避現象」、「母語知識影響」、「指導の不足点」、「誤用」、「苦手意識」、「カタカナ語自体の難点」、「言語環境の影響」の9つの問題点が見られている。それに、「副教材の利用」、「カタカナ語重要性の強調」、「教材中の外来語の増加」、「英語援用」、「システムの利用」、「外来語の選別」、「表記規則の教授」、「語源知識の教授」の8つの面から、教育改善策が提案されている。最後は先行研究の5つの不足点を指摘し

ている。英語母語話者の場合は「英語の母語影響」、「苦手意識」、「異文化受容」、「言語環境」の4つの問題点が見られている。教育改善策は「異文化受容態度の改善」と「外来語の選別」の2つだけ提案されている。最後は先行研究の6つの不足点を指摘している。

全体的に中国語・英語母語話者のカタカナ語習得を対照した結果、両方ともカタカナ語の習得過程において、英語知識の影響を大きく受けていることが明らかになった。それに、両方の外来語(カタカナ語)の誤用種類・パターンに類似性が見られているが、中国語母語話者の誤用数が英語母語話者より多いことが分かった。一方、教育改善策について、両方とも雑多な外来語(カタカナ語)を選別する必要があると主張している。それに、多角的な視点から見ると、英語母語話者の外来語(カタカナ語)習得・教育が重視されていないことが明らかになった。

先行研究を踏まえて、これからの英語母語話者を対象とする多岐にわたるカタカナ語習得・教育研究が期待されている。さらに、教育現場でのカタカナ語の教育改善策を講じて、教育効果を検証することが重視されてほしいと考えられる。特に、「オンライン学習システムの実装」と「教科書の外来語語源・原語の添付」の教育改善策が非常によい教育効果を得ることが想定されている。

文献総説を通して、より説得力のある分析結果をもらえるために、さらに多くの文献を考察すべきであると筆者が考えられる。